
勝利の味は（BLEACH）

南条武都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勝利の味は（BLEACH）

【Nコード】

N3827G

【作者名】

南条武都

【あらすじ】

「拍ち払え、龍赤火！」 「吠えろ、蛇尾丸！」 BLEACH恋次とオリジナルキャラ・茜のお話。戦闘描写ありのラブコメです。（自サイト掲載）

手の中の柄を握りしめ、感触を確かめる。正眼に構えた刃先の向こうには、同じように構えた恋次がいて、怖いくらい真剣な顔でこっちを睨み付けていた。互いの呼吸が、聞こえているような感覚。さわさわと囁く梢の声、土を掘り返して潜り込む虫、足下に巻く風、草いきれ、自分を取り巻くそれらが不意にかき消えた時、

「――ふっ！」

同時に地面を蹴った。瞬く間に互いの距離が縮まり、刃が硬質な音を立てて噛み合う。上段から振り下ろされた斬魄刀を受けると、刀と手に衝撃が走って指先がしびれる。

（相変わらず、重いっ）

あたしより体が大きいし、そもそも男だから、恋次の打撃は重い。「おらおらどうした茜、怯んでんじゃねえぞ！」

あたしが気圧されたのを見てとって、恋次が声を張り上げ、刀を振るう。そのまま何合か打ち合ったけど、相手の勢いに押されてどんどん後ずさってしまう。

このままじゃ競り負ける、そう判断してあたしはぐん、と膝に力をためて後ろに跳んだ。恋次が間合いを詰め寄ってくるより先に、

「拍ち払え、龍赤火！」
りゅうせつか

解号と共に、手の中で柄が棒の感触に変わり、刃先は三つ又に分かれて伸びる。ざんっ、と前足を強く地面に押しつけて、三叉戟となった斬魄刀を恋次に向かって突き出した。

「！ ととっ！！」

正面から穂先に突っ込みかけて、恋次は慌てて制動をかける。下半身がもたついている隙に、あたしは前へ踏み出して突きを繰り出した。だけど一撃が肩をかすめただけで、後の攻撃は身軽に避けられてしまう。ぎん、と固い音を立てて刃が横へ流されたのに敢えて逆らわず、体ごと移動して体勢を立て直した。だけどそれがまずか

った、

「吠えろ、蛇尾丸！」

恋次の解号が響いた、と思った瞬間、右の視界に黒い風が見えた。咄嗟に龍赤火を縦に持ち替えて右手に構えると、そこを狙いすましたように、遠心力のついた重い衝撃が襲いかかってきた。

「ぐっ！」

踏ん張った足が浮いて、そのまま視界が回る。吹っ飛ばされて横転してそのまま転がって、勢いをつけて起きあがった。だけど頭がくらくらし、膝が折れそうになる。やばい、結構いい一撃をもらってしまった。

「リーチなら俺の方が上だぜ、茜！」

高らかに告げて、恋次がぐんと腕を伸ばす。その腕の延長のように蛇尾丸が空で軌道を変え、風を切ってこちらへまっすぐ襲いかかってくる。

リーチであたしに利があるのは、確かに恋次が解放する前までだ。このままじゃ何も出来ない。思い切って前方へ跳んだ。恋次が手首を返して蛇尾丸を横になぎ払おうとするのが見えたので、地面すれすれまで体を下げて走る。烈風を伴って頭の上を通り過ぎたのと同じ時に、恋次が舌打ちして蛇尾丸を手元に引き戻す。だけど遅い、刃が刀に戻るより龍赤火の射程範囲に恋次を捕らえられる。シッと歯の間から息を吐き出し、胴めがけて三叉戟を突き出す。

（とった！）

だけど手応えが無かった。黒い死覇装が突然視界から消え、勢いあまってつんのめる。しまったと上を仰ぎ見た時、空に跳び、頭上に蛇尾丸を掲げた恋次の影が目には焼き付く。

「おおおおおおおお！」

（来る！）

咆吼を上げて恋次が真上に降ってくる。一瞬、受けようと龍赤火を上げかけ、あたしは寸前で考えを変えた。視界の中でぐんぐん恋次が大きくなり、鋭く光る蛇尾丸が迫り、

「っ茜!？」

構えもしないあたしに驚いたのか、恋次が焦った声をあげた時、軸足を回して身を翻した。ドンッ、と地面が揺れて蛇尾丸が大穴を穿ち、恋次の体が沈む。無防備に晒されたその首筋に、あたしは龍赤火を振り下ろした。

「ガッ！」

打たれた恋次は悲鳴を上げて地面に倒れた。起きあがれないように龍赤火で押さえ込んだ。そのまま恋次がいつくばったまま唸っているのを見て、切れる息の下から歓声を上げる。

「やつ、た、恋次から、一本、取った！」

「う……くそっ、負けた」

龍赤火を引くと、恋次はゆっくり体を起こし、頭を押さえた。慌てて脇に膝をつく。

「ごめん、大丈夫？」

「ちっと待て……あーくそっ、良い一撃よこしやがって」

「それはこっちだって同じです」

袖をまくって見たら、恋次の蛇尾丸を受けた腕が赤く腫れ上がっているし、体があちこち痛い。しばらく立てそうにない恋次の代わりに取ってきた荷物の中から水筒を取り出し、差し出す。

「水、飲める？」

「ああすまねえ、もらうぜ。……はー、ったく、ずりいな茜は」

ぐいっと煽り、喉をぐくぐく言わせて飲んだ後、恋次はだらりと地面に座り直して言った。「何がずりいのよ」水筒を受け取って口をつけながら聞いたら、

「さっきお前、俺が上から行った時、全然構えなかったろ。あのまま斬られるつもりかと思って焦ったぜ」

「構えてたら、あのタイミングで避けるなんて出来なかったもの。ずるいとは違うでしょ。大体、恋次みたいな力任せの剣を、しかも頭の上から受け止めたら、腕が折れちゃうわよ」

「まあ、そりゃそうだけどよ……」

男なら真つ向勝負という美学でも持つてゐる恋次としては、割り切れないものがあるらしい。けど、そんな事あたしの知った事ではない。不満そうに口を尖らせる恋次の顔をのぞき込んで、にーっと笑う。

「勝ちも勝ちだもんね。約束通り、富貴屋のあんみつおごつてよね」
「ちっ、分かったよ」

悔しそうに地面を拳で叩く恋次。あたしはその脇で、顔がにやにやしてしまふのを止められなかった。

だって恋次から一本取ったってこれ、すごいよね？

[illegible]

「お前^どんだけ浮かれてんだよ」

俺の横に腰を下ろした茜は、さつきから笑いが止まらないらしい。

「いいじゃない、少しくらい浮かれたって」

と言って、後ろに倒れた。強くこづいちまったか、と一瞬ひやりとしたが、ただ単に横になりたかっただけなのか、茜は相変わらずしまりのない顔で、うーんと大きくのびをした。

「あー、勝った後は空まで綺麗に見えるなー、気分爽快」

「嫌みかよ、このやろぅ」

茜に倒されて少なからずショックを受けてる俺の前で、良くもそこまで言ってくれるもんだ。えー違うよー嬉しいだけー、とひらひら手をふる茜の言葉は本当だろうが、このままじゃ虫の居所が悪いままだ。そうだ、仕返ししてやろう。

俺は茜の脇に手をつけて、体をまたいだ。いきなり上にのしかかれた茜は、「ん？」きょとんとして目を瞬く。事態を理解するより先に、俺は茜の口を塞いだ。

!

声を発しようとして口を開くのや、びく、と震えるのや、俺を押し戻そうとするのを全部無視して、死覇装の上から茜を撫でる。もうすっかり慣れ親しんだ柔らかい感触を楽しんでいたら、やっこの事で俺から顔をひきはがした茜が、

「い、たいていのよ、バカ!」

「ガッ!？」

いきなり頭突きをかましてきたので、視界が揺れた。さっき脳しんとうを起こした時と同じように頭の中でくわんくわんと音が鳴り響き、目眩が襲いかかってくる。

「おうっ……」

思わず頭を抱えてうずくまると、俺の下からはい出た茜も地面にへたり込んだ。

「れ、恋次のバカ、何考えてんのよ、こんなところで!」

「う……いや、だってよ……」

「だ、だって、何も、あいたたた……」

茜は呻いて自分の体を抱きかかえた。その様子を見て、俺はようやく思い出す。

そういやさっきの手合わせで、体中あちこち痛いとか言ってたっけ。大怪我はしてないだろうが、裾からのぞく手足には打ち身擦り傷が見えるから、服の下もおんなじ事になってるんだろう。そこをなで回されりゃ、そりゃ気持ちいいどころの話じゃねえよな。

「わ、わりい茜。早いとこ四番隊行こうぜ」

「四番隊、行くほどじゃないけど……とりあえず、恋次」

怒りの形相で茜は俺にびっと指をつきつけ、高らかに通告した。

「あんみつに鯛焼きと最中、追加!」

「……どんだけ食うつもりなんだよ、お前は」

（後書き）

ここまで読んでいただき、有り難うございました！
最近戦闘描写が、下手なりに好きだということに気づいたので、恋次とオリキャラで一戦交えてみました。

恋人同士でありながら好敵手でもある、という関係を描きたかったので、執筆中、楽しかったです。この作品を読んで下さった方にも、楽しんでいただければ、とても嬉しいです♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3827g/>

勝利の味は（BLEACH）

2011年8月15日03時24分発行